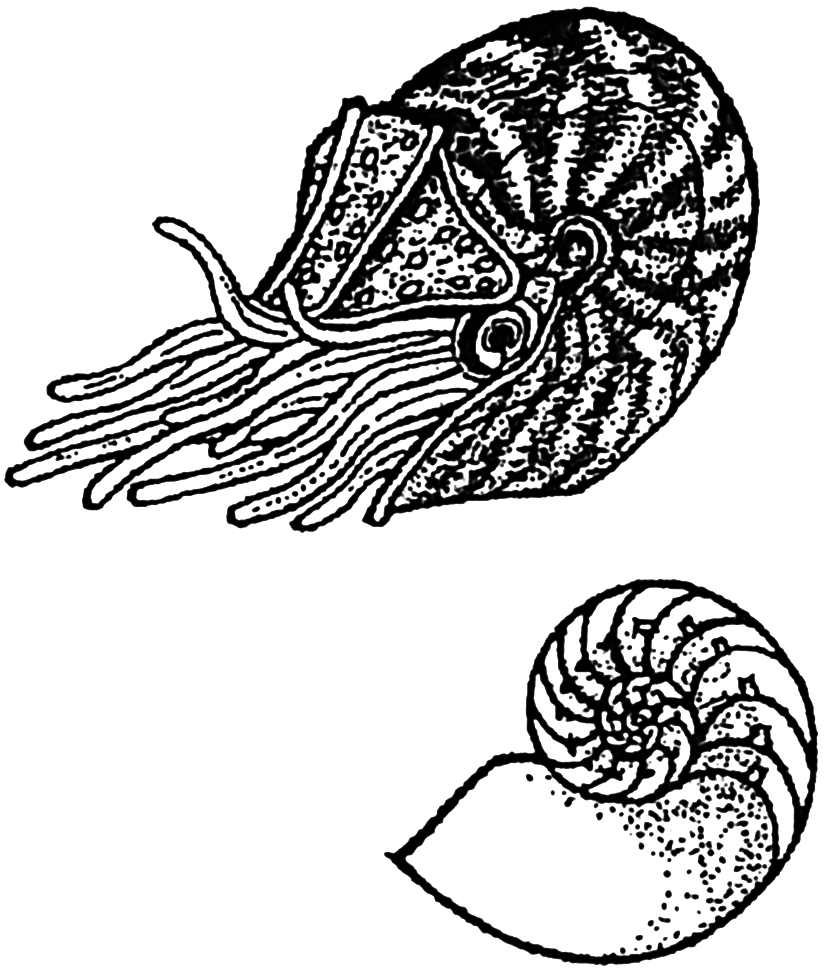
19　次の文を読んで、後の問に答えよ。 〈京都大〉　二〇一六年度出題

　・Ｇ・Ｋ・カーンとＳ・Ｍ・ポンピアは一九七八年に発表した論文の中で、現存種のオウムガイの殻の外面に見える細かい成長線の数を数え、二枚の隔壁の間に挟まれた小室一つ一つに平均約三十本の細線が含まれること、その数はどの殻を見てもまた同じ殻のどの小室を見てもほとんど変わらないことを報告している。深海にむオウムガイは夜になると海面に浮かび上がってくる。太陽の周期に合わせて浮沈するオウムガイの殻の細線は、一日ごとの成長の記録だと考えられるだろう。隔壁は月の周期に同調して作られるのだと仮定すれば、毎月三十本ということで数はぴったりと合うわけだ。カーンとポンピアは、年代にして四億二千万年前から二千五百万年前にわたる二十五個のオウムガイ類の化石について同じ調査を行った結果、一小室あたりの細線数が、現存のものでは三十本、もっとも新しい化石で約二十五本、最古の化石ではわずか九本と、年代の古いものほど規則的に少なくなることを明らかにした。すなわち、四億二千万年前の地球では、ひと月はたった九日間しか持っていなかったのである。これは当然のことであり、その理由を説明するのは簡単だ。すでに天文学と地球物理学が明らかにしているように、摩擦によって自転に制動のかかる地球は減速するにつれて運動量を失ってゆくが、月は、その地球が失った分の運動量を受け取ることによって、地球からの距離をだんだん大きくしながらその周囲を公転してゆくことになるからである。言い換えれば、月は少しずつ地球から遠ざかりつつある。地球の自転が今よりもっと速く一日が二十一時間しかなかった四億二千万年前に、月は今よりずっと地球に近いところにあり、わずか九太陽日で地球の周囲を公転していたのだ。カーンとポンピアは幾つかの方程式を解いた結果、当時の月は、地球からの現在の距離のたった五分の二強という近いところを回っていたはずだと結論しているという。古生代のオウムガイはすでに原始的な眼球を備えていた。彼らはその眼で、夜ごと深海から浮かび上がってきては、今われわれが見ている月とは比べものにならないほど巨大な月を眺めていたのである。

参考　オウムガイと殻の切断図



　オウムガイの殻に残った細線の数が意味するものに関して、ールド自身はカーンとポンピアの仮説にいくぶんけねんを呈しており、それはまことにもっともな点をいているのだが、九本が正確に九日間に対応していると断言するのは行き過ぎであるにせよ、少なく彼らの推論の大まかな方向づけはそのままってよいもののように思われる。いや正直に言えば、太古の海で巨大な月を見つめているオウムガイに思いを致すのはあまりにも魅力的なので、グールドの懐疑論耳を貸したくないという気持が強いのだ。

　われわれもまた、時として、明るく輝いている黄色い月が思いもかけぬ大きさで地平線近くにかかっているのにふと気づいて驚くことがある。だが、四億二千万年前の月の大きさはそんなものではなかっただろう。それは、中天まで昇ってきてもなお巨大なしいを圧し、その堂々たる輝きで満天にめられた星々のめきもかすんでしまうほどだったことだろう。昔の光とは、ここで、今の光とはまったく違うもののことである。それは、今の光からの類推によってイメージを作ることができるようなものではないはずだ。わたしは今、それを想像してみようとは思わない。想像などという行為がいったい何になるだろう。の風鈴やあのの炎もまた、わたしは想像したわけではなかった。わたしはそれを見たのであり、現に見ているのである。他方、四億二千万年前の月光の場合、それはわたし自身の肉体の延長をはるかに越えた昔の光であり、わたしはそれを一度も見たことがないしこれからも見られようはずはない。もちろん何とかそれを想像してみよう、脳に思い描いてみようと試みることはできる。たとえば世界の終末の光景をかれたように詩にった前世紀のフランス詩人コント・ド・リールにとっての文学創造とはそうしたことだった。だが想像力が豊富であると貧弱であるとを問わ想像するとはそれ自体、精神の営為として基本的に貧しいものでしかありえない営みだと思う。しばしば詩人の富として語られることもある想像力というものの徳について、わたしはかなり懐疑的であえそらごととしか見えぬ弱々しい想像もあろはくしんの力強さを帯びた想像もあるだろうが、いずれにせよ想像されたものは、結局想像されたものでしかないからである。いかなる場合でも想像は現実には及びようがない。

　四億二千万年前の月はたしかに地球の海を照らし出していた。オウムガイたちは波間に揺られながらその光を見つめていた。これはたしかにあったことである。今われわれが豊かだったり貧しかったりする想像こうしして構成しようと努める独創的だったり凡庸だったりするイメージとは無関係に存在している、確固とした事実である。昔の光は、昔、たしかにあった。この「あった」の重さにはいかなる想像力も追いつきようがない。この光を古生代のオウムガイの眼が見つめていたという過去の現実は、化石の殻の小室ごとに刻まれた九本の成長線がはっきり証し立てている。これら九本の微細な線の前ではいかなる人工的なイメージも無力である。われわれが今見ているのとはまったく違う月、中天を圧して輝きわたっている巨大な月を、オウムガイたちはたしかに見つめていた。夜ごと日ごと浮沈を続けながらそれを見つめていた生物が現実に生きていたのだ。わたしはそれを見ることができないが、このオウムガイたちはそれをたしかに見ていたのであり、のみならず自分がその光を見ていたという事実を自分自身のに刻印し、四億二千万年後の今日に残しているのである。彼らがみずからの肉体に残った痕跡の形でいわばわれわれに遺贈してくれたこの証言、これ以上物質的ならざるはないこの証言を通じて、われわれはそうした光が存在したことを知ることができわたしが感動するのはここのところだ。それを見ることはできないが、かつて在りし日にそれを見ていた者を見ることができる、――彼がたしかにそれを見ていたという現実を証明する物質的な証拠を見ることができ、つまりはそれによってその光を知ることができるということ。四億二千万年前の波間にそうした月光がそそいでいたことを、今わたしは知っているということ。知ることとは、ここで、想像することをはるかに越えて豊かで本質的な営みとしてあると言うべきである。見ようとしても見られないものを想像するというのはしばしば安っぽい文学的感傷でしかない。だが、いかなる想像も追いつきようのないものを知ることができるというのは、これはまた何と人を興奮させる出来事であることか。

（松浦寿輝『青天有月』より。参考図は出題者による）

注（＊）

　Ｐ･Ｇ･Ｋ･カーンとＳ･Ｍ・ポンピア＝ともにアメリカの科学者。二人の論文「オウムガイ類の成長周期と地球︱月系の力学的時間発展」は、『ネイチャー』二七五号（一九七八年一〇月一九日号）に掲載された。

　角運動量＝回転運動の特徴を表す基本量。地球︱月系の角運動量は常に一定に保たれている。

　グールド＝スティーヴン・ジェイ・グールド（一九四一︱二〇〇二）。アメリカの古生物学者、科学史家。筆者は、グールドの著書『パンダの親指』（原著は一九八〇年刊）に拠りながら、この文を書いている。

　あの風鈴やあの蠟燭の炎＝少年の頃に筆者が見たり聞いたりした風鈴や蠟燭の炎を指している。

　ルコント・ド・リール＝十九世紀のフランスの高踏派の詩人、劇作家。

問１　傍線部（ア）～（オ）のひらがなを漢字に改めよ。

問２　傍線部（Ａ）の内容を説明せよ。

問３　傍線部（Ｂ）には、筆者のどのような心情が込められているか、わかりやすく説明せよ。

問４　傍線部（Ｃ）について、筆者はなぜこのように思うのか、説明せよ。

◎問５　傍線部（Ｄ）はどういうことか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　（ア）＝懸念　（イ）＝四囲　（ウ） ＝絵空事　（エ）＝迫真

（オ）＝行使

問２　Ａ現存のオウムガイの殻の細線は、月の周期に同調してできる小室一つにつき三十本あることから、Ｂ一日ごとの成長の記録だと考えられる。Ｃ四億二千万年前の化石には一小室当たり成長線が九本しかないことから、Ｄ太古の月は、現代より、もっと短い周期で、Ｅ地球のずっと近くを公転していたはずだということ。

Ａ＝２〔「小室が月の周期に同調してできる」という内容がなければ減点１。〕

Ｂ＝２〔「細線が一日に一本できる」という内容があれば可。〕

Ｃ＝２

Ｄ＝２〔「九太陽日で公転」など具体的な数値を書いていれば減点１。〕

Ｅ＝２〔「現在の五分の二強の近さを公転」など具体的な数値を書いていれば減点１。〕

Ｄ・Ｅがなければ全体０。

問３　Ａグールドの指摘どおりカーンとポンピアの仮説にはたしかに行き過ぎがあるが、Ｂ全身に巨大で明るく輝く昔の月の光を浴びるオウムガイという、Ｃ想像を超える過去の現実に遭遇し、Ｄ今はその驚きに浸っていたいという心情。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝３

Ｄ＝３〔「仮説の魅力を大切にしたい」「感動を邪魔されたくない」なども可。〕

Ｄがなければ全体０。

問４　Ａ事実としての現実は人間の想像力とは無関係に存在し、Ｂどんなに豊かな想像力も及ばない。Ｃ見ることができないものを思い描いた人工的な想像の世界は、Ｄ浅薄な感傷的営みに過ぎないから。

Ａ＝２

Ｂ＝３〔「想像力は現実の重みには及ばない」という内容があれば可。〕

Ｃ＝３／Ｄ＝２

Ｂがなければ全体０。

問５　Ａ太古の巨大な月の光をオウムガイは現実に見ていたのであり、Ｂそれが成長線という痕跡として残り、Ｃその物質的証拠によってわれわれは、想像では及ばない過去の現実を知る。Ｄそうした、知るという豊かで本質的な営みに、Ｅ筆者は心を打たれること。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２／Ｅ＝２

Ｄ・Ｅがなければ全体０。